

# グランドサハラ エクスペディション - 7

## I <サハラ縦断>ギニア湾に出る！ ガーナ

### 【熱帯雨林のジャングルを越えて】

12月27日 今日ついに最後の国境を越える。ガーナに入るのだ。出国・入国に5時間費やす。国境ではカメラは禁止だ。どんなに興味をそそられるシーンがあっても写真を撮る事はできない。心の中でシャッターをきる。国境での人々の活気、行き交う豊富な物資、人の移動・積荷の限界を超えたバス。自転車も積む、バイクも積む、マットも積む、ニワトリも積む、ヤギも積む。乗れる所に乗れるだけ、自分の体重を支える力さえあればどこにでもぶら下がる。人の生きる活動の凄まじさ、その迫力に私は圧倒されてしまった。彼らはこの暑さなんてものともしてない。しかし私たちは今までになく皆ぐったりと暑さに耐えるのだった。暗闇の中、立ち込めたベールが、砂塵か排ガスか分からない状態でナイトランを続けガーナ北部の田舎のホテルに到着する。



あと走行する日は3日のみ、1000キロをきった。年末という感じはどこにもない。曜日感覚もなくなってしまった。我々の前進している方角が真南になった。そうだ、海へ向っている。赤道に近づいているのだ。タマレから約200キロ南下するとついにジャングル、熱帯雨林へ突入する。どういう条件下でここまで樹木が成長するのか分からない様な見たことがない大木、天に突き刺さるような高木の下にアブラヤシが生い茂る。ジャングルを突き抜ける一本道に深い緑の木々が覆いかぶさる中、私たちはひたすら南下した。

小休止するとどこからともなくバナナ売りの女の子が登場する。その後、西アフリカでの最大級のマルシェがあるクマシへ入った。市街地を抜けて人と車の大渋滞の中、郊外のホテルへ移動した。とにかく排ガス規制などないから物凄い。顔中真っ黒。サハラの砂漠越えよりマスクが必要だった。



十分に体を休め、翌日仲間とホテルから歩ける距離の部落を歩いてみる。「How do you do?」が返ってくると安心する。ガーナは英語圏なのだ。朝からタロイモが売られている。女性は皆、色のおしゃれを楽しんでいる。とにかく原色の使い方がうまい。仕立て屋は男の仕事である。女性と話す時はよく髪に触られる、日本人の黒い直毛が珍しいようだ。

私は再びミシュランの地図を広げてみた。サハラのアオアシス・チュニジアのトズールでギニア湾までの道のりを思った時、計り知れない大きな不安が胸にあった。そして蜃気楼に誘われる様に砂の水平線の消失点に向かってひたすら走ってきたのだ。それは我武者羅と言うより異世界に抱かれながら確実に瞼に驚異の自然の姿を焼き付けてきたように思う。バイクの旅でしか得られない自然との対話を楽しんできたのだ。そこには生と死もあった。

長いサヘルからサバンナを越え一気に密林へ南下し、6000キロ余り。あと一日を残して海へ出る日が来るのだ。



### 【ラストラン ギニア湾のヤシの木】

12月30日、むし暑い密林をくぐりぬけてついに私たちはギニア湾に出た。地平線は水平線へ変わった。我々はバイクを止めしばらく海風に吹かれた。誰の胸中にも遠く離れたサハラがあった。寒かった砂漠、暑かった砂漠、砂にとられたタイヤ、深い轍、誰もいなかった異世界空間、砂漠の民トウアレグ。私たちは確かに自分自身のバイクでサハラ砂漠を越え、アフリカを縦断したのだ。海から海へ、陸路の長い旅が終わった。その後、ケープコーストから最終地アクラへ無事移動し過酷な道のりを共にした相棒に感謝の言葉をかけ静かにエンジンを止めた。

ガーナのホテルはプライベートビーチを持つ快適なホテルだった。私たちはサハラ砂漠縦断絶漠エクスペディション完走を祝い全員で盛り上げた。

私はふと思い出す。砂漠のライディングで痛れ、汗と砂にまみれ顔も洗わず寝袋に潜り込んだ砂漠のキャンプ、硬いフランスパンとサディーンの缶詰が続いた日々。冷えていないコーラ、水が出ないシャワー。あんなに辛く不自由だった時間がこんなに懐かしく愛しく感じられるものかと…。私はあの熱い日々は自分がある意味アフリカの人と同じ様にあるだけの力を生きる為に使った黄金の日々だったと確信して止まない。

ギニア湾に面した海岸線は遠々にヤシの木が続いていた。

サハラ縦断6500キロ

